～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

対面リーディング通信

2015年4月

2015年4月1日 発行　　　第163号（隔月刊）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

基礎講習会のお知らせ

今年度の第1回目の基礎講習会を、以下のとおり開催します。
これから活動を始めたいと思っている方はもちろん、すでに活動中で、活動のなかでお困りのことがある方、「対面の基本」をもう一度確認されたい方も、ぜひ一度ご受講ください。
また、対面リーディングに関心のある方がありましたらお伝え下さい。

日時　４月２４日（金）　13時～17時
（全1回）

場所　情報文化センター本館４階会議室

対象　これから対面の活動をご希望の方。
または、興味のある方。

講師　当館職員ほか

定員　10人

受講料　無料

内容　視覚障害者の理解、対面のサービス内容とルール、利用者との対応の仕方などをロールプレイやＱ＆Ａでわかりやすく学びます。
（「読み方」など技術的な講習ではありません）

申込　４月１８日（土）までにサービス部（電話06-6441-0039）対面担当（木田、福田）まで。

今月号の主な内容

対面リーディング難所物語	漫画の音訳・点訳が脚光を浴びる年！（その２）	二村　晃	2
私のふるさと	わたしのふるさと	中山　勝巳	3
誌上勉強会	絵画を説明する	木村　謹治	4
寄り道・回り道	Lion Heart ライオンハート	木村　謹治	8
人と人生	ヘレン・ケラー	望月　明	9

対面リーディングの難所物語〈CⅢXⅠ〉 131

８０．漫画の音訳・点訳が脚光を浴びる年！（その２）

二村（ふたむら）　晃（あきら）

　正月松の内に、点字毎日の澤田記者から漫画の音訳を希求する視覚障害者の一人として取材を受けたと前号で報告しましたが、２月２２日号の「点字毎日」本誌と共に、活字版では「視覚障害者にも耳で読む漫画を！」と、音訳研修会で熱弁を振るっている私の写真まで掲載して頂きました。漫画点訳者や音訳者の仕事ぶりも紹介され、漫画に関心が集まっている視覚障害者の現状を捉えた見事な特集記事でした。

　いつも林曠子（ひろこ）先生門下のグループＮ‐ｂｕｎの作品ばかりご披露していますが、今年は堺市視覚聴覚障害者センターの作品も、本欄で採り上げたいと思っています。前号で私が絶賛したページをめくる際の効果音についても、堺のグループでは話題に上っていたとのことですし、大阪と堺の漫画チームが手を組んで、漫画音訳作品の質と量をもっともっと拡げていってほしいものです。

　さて、昨年の暮れに私の手元に届いたもう一つのゴルゴ作品についてご紹介しましょう。１９６９年４月の作品ですから、連載開始直後のごく初期のものです。音訳なさったのはＴさんです。以前にも、「ゴルゴ13」と命名された経緯が語られる最初の作品を音訳して下さった方で、１コマ１コマの説明をおろそかにしないコマ番号を追った丁寧な読み口はオーソドックスな音訳と、感服したものでした。

　この作品は、『白夜は愛のうめき』と題され、パート６まで、270コマで、ゴルゴ作品としては短篇と申せましょう。お話は長い黒髪の美女がマンハッタンのホテルに入って来るところから始まります。彼女はバーのカウンターでグラスを傾けているゴルゴと目が合いますが、二人の間に会話はありません。更に翌日、空港に送られる車に相乗りしますが、沈黙のままで、彼女は途中で雨の中に不可解な下車をします。搭乗したＤＣ‐８の機内で隣席になり、並んで座る二人。あまりの偶然の重なりに、初めて短い挨拶。この三度目の出会いまで、パート１～３の１５６コマ、二人に会話はないまま進行します。

　ところが、着陸しようとした機に車輪が出ない事故が発生したのです。止むなく機長は胴体着陸を敢行しますが、そのスリリングな状況が事細かに描かれていきます。胴体が地面に触れた激しい音と振動に、恐怖に堪えかねた彼女はゴルゴの胸にしがみつきます。機は止まり、安堵した彼女とゴルゴは、抱き合ったまま静かに唇を合わせます。そして、ノルウェーのドルムセ、太陽の沈まない午前１時の白夜に二人は一つになるのです。

　女と別れ、海岸にある朽ちた要塞の高い石塀の上に立ったゴルゴは、狙った標的を射殺します。が、螺旋階段の下に追って来た女が居たのです。殺しの現場を見た者は生かしておくわけにいきません。ゴルゴの銃から銃声が……。悲しい結末でした。

　初期のゴルゴ13には、このストーリーのように国際情勢とは全く関わりのないテーマもあったのですね。もつれた国際間の緊迫の中で、サスペンスとスリルでギラギラしているゴルゴとは別に、愛欲篇も時にはいいものです。有難う！　〈つづく〉

わたしのふるさと

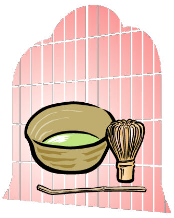
サービス部　中山（なかやま）　勝巳（かつみ）

私は大阪生まれの大阪育ち、大阪府堺市出身です。
その堺市には歴史的に有名な場所や人物がいます。最も有名な場所は「仁徳天皇陵古墳（大仙（だいせん）陵古墳）」ではないでしょうか。

仁徳天皇陵古墳は、中国の秦の始皇帝陵、エジプトのクフ王のピラミッドと並ぶ世界3大墳墓の一つといわれ、上から見ると円と四角を合体させた前方後円墳という日本独自の形で、古墳の陵域は濠を含めて47万平方メートルと、なんと甲子園球場が12個も造れる広さです。古墳を造るには、毎日2,000人の人々が働いても15年以上かかったといわれています。全国に20万基以上はあるといわれる古墳のなかで、日本最大の古墳が堺市にあります。日本最大の前方後円墳である仁徳天皇陵古墳は、北側の反正（はんぜい）天皇陵古墳(田出井山（たでいやま）古墳)、南側の履中（りちゅう）天皇陵古墳(石津ヶ丘（いしづがおか）古墳)とともに百舌鳥耳原（もずみみはら）三陵と呼ばれ、現在はその中陵（なかのみささぎ）・仁徳天皇陵として宮内庁が管理しています。

古墳の周りは全周2.8kmの周遊路として整備され、南側前方部と西側には遊歩道、南側車道には桜並木があります。また、徒歩圏内には大仙公園などもあり、四季折々の花々が咲いています。

有名な人物では、堺で生まれ「侘（わ）び茶」を大成した千利休です。侘び茶とは、何も削るものがないところまで無駄を省いて、緊張感を作り出すというものです。
千利休は大永（たいえい）(1522)年、堺今市町（いまいちちょう）(現在の宿院町西（しゅくいんちょうにし）1丁)の豪商魚屋(ととや)の長男・与四郎として生まれました。17歳の時北向道陳（きたむきどうちん）に茶湯を学び、のちに武野紹鷗（たけのじょうおう）に師事し、侘び茶を大成させました。織田信長が堺を直轄地としたときに茶頭（さどう）として雇われ、その死後は秀吉の茶頭として仕えていました。
千利休は、60歳までは先人の茶を踏襲し、61歳から独自の茶の湯を始めたといわれていますので、死ぬまでの10年間が侘び茶の完成期だったということになります。



ほかには、明治・大正・昭和を短歌とともに生きた「情熱の歌人」与謝野晶子。この方も堺市出身です。本名：鳳志よう（ほうしょう）。和菓子で有名な駿河屋の三女として生まれ、夫となる鉄幹に出会い、家を出るまで堺で過ごしました。少女の頃から文学的な才能を発揮し、明治34(1901)年に出版された「みだれ髪」は、与謝野晶子の代表作となりました。明治37（1904）年、日露戦争中に従軍中の弟を嘆いて『君死にたまふことなかれ』を発表しました。
また、詩、評論、古典研究などさまざまな執筆活動を展開する一方で、女性の権利に焦点をあてた評論も多く著し、当時の女性の地位向上に積極的に取り組んだことでも有名です。

いかがでしたか？寒い時期ももう少ししたら終わりです。暖かくなってきたら散歩がてら堺市に足を運び、歴史を感じに来られてはいかがでしょうか。

誌上勉強会

木村（きむら）　謹治（きんじ）

対面リーディングの実際　９

－　絵画を説明する　－

「美術は難しい」とか「美術館は堅苦しい」といったイメージが、美術や美術館を私たちの生活から遠いものにしています。まして、視覚障害者にとって、美術館は遠い存在のように感じるのではないでしょうか。しかし、本来美術や美術館は、私たちに身近で開かれたものです。
今回参考にさせていただいた「ＭＡＲ」は、美術館をもっと身近に、もっと楽しむために、障害のある人もない人も、共に楽しめるように市民と美術館を結ぶ緩やかなネットワークグループとして活動されています。
視覚障害者とともに芸術を楽しく鑑賞するためには、どのようなことに気を付ければいいのかなど、「ＭＡＲ」が書かれたレポート『視覚障害のある人と共に楽しく鑑賞するには』を参考に、対面リーディングへのヒント（応用）を探って行きたいと思います。
原文のURLは「http://www.ableart.org/org/mar/skill.html」です。原文を参考にしながら対面リーディングに相応（ふさわ）しいように、追加・削除・書き換えをしています。もし興味が有りましたら、上記のURLをクリックしてください。
なお、「ＭＡＲ」は「まー」と読み、「Museum Approach & Releasing」の略称です。“人と美術を、人と美術館を、人と人とをもっと身近に、もっと解放していこう”という意味だそうです。

はじめに

視覚障害者は聴覚や触覚が発達していると思われがちです。確かに感覚の優れた方はおられます。
視覚障害者の多くの方は経験的に、使うコツを積み重ねて、研ぎ澄まされてきたものです。

2006年の統計によると、視覚障害者の年齢構成は、60歳以上の方は約72%を占めます。70歳以上に限ってみても５０％です。
また、日本人の失明原因である緑内障（25.5%）、糖尿病網膜症（21.0%）で半分を占めます。糖尿病を放置しておくと合併症を起こします。合併症の中でも早く出てくるのが糖尿病神経障害です。症状の出方はさまざまですが、手足のしびれ、けがややけどの痛みに気づかないなどです。

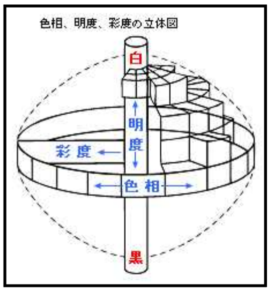
視覚障害者で点字を読める人は10%にも達しません。年齢のことや指のしびれなど、さまざまな原因が考えられます。

私たちの親戚、近隣、学校、職場などを見渡してください。多くの感覚の優れた方を発見することができます。
同じように視覚障害者も感覚の優れた人、普通の人、色々おられます。

見えない人の色の概念

全く見えない人でも、ほとんどの人が色の概念を持っています。生まれつき見えない人は、身近な物や他の概念と結びつけて認識しているようです。例えば、「赤」だったら、「リンゴ」「トマト」「夕焼け」「赤ら顔」「目を赤くして」などのようになっています。

また、明るいピンク＝可愛い、赤＝情熱的など色の持つ一般的なイメージや、何かで説明されたときの情報を蓄積する感じです。
これらの言葉は、色の説明をするときに使えます。「何々みたいな赤」などと。



もちろん同じ赤でも、様々な種類があります。色相、明度と彩度（別の言い方をすれば「色合い」「明るさ」「あざやかさ」）の違いにより、赤と表現される色でも何百・何千と区別することができます。
蓄積の度合は人によってさまざまです。また、イメージはイメージ。ものごとを正しく表しているものではありません。しばしば正確ではないのですが・・・それは、周りの人がうまく言葉を足して説明するしかないですね。

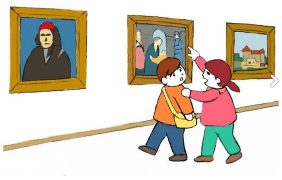
生まれつき見えない方にとっては、色は概念だと思います。言葉で、海は青い、ということを伝えれば、海は青いんだな、と覚えられますが、具体的に青がどのような色かは理解することはできません。

鉛筆画で知られている木下晋（きのしたすすむ）さんは自分のモデルであった老瞽女（ごぜ）・小林ハルさんが彼女の長く波乱に満ちた人生について語るのを聴いて、このようなことを言っています。
「生まれながらにして一度も世界を見ることがなかった人の語る風景に色や形があることに私は驚かされ・・・・形は何とかなるとしても、色は完全に彼女が構築した概念の世界である。見えないものを見て、その言葉をもつというということは、驚きであるというより神秘的である。常人が到達できない領域であるようにも思える。」

私の子どものころは「肌色」と言う色がありました。肌の色は人それぞれ、人種により違ってきます。また、同じ人種でも個人差が大きいです。それも踏まえて今は「肌色」という色はありません。
女性の場合は鏡に向かう時間は長いと想像されますが、顔色一つ伝えるのは難しいです。
肌の色は、黒・黄色・白で表せるほど単純なものではありません。
それほど色を説明するには困難を伴います。でも、何も説明しないわけにはいきません。
やはり『リンゴのような赤』とか『海のような青』のように他の概念に結びつけて言うか、単に「赤」とか「青」と言うしかないですね。

絵の説明をするということ

絵の説明をするときに、「どの方法が最適か」ということを、最初から決めてしまわずに、いろいろ試す中でお互いにリラックスできる形を作って下さい。



見えない人にとって、平面の作品はなじみのない物かもしれません。しかし、積極的に話しかけたとき、見えない人はきっと新たな楽しみを知ることになると思います。ただ、視覚的イメージを創造的に膨らますことは、集中力のいることなので見えない人が疲れることも事実です。

満足度（充実度）

何をおいても最も重要なのは、見える人と見えない人が、作品を話のネタにしてコミュニケーションをするということです。コミュニケーションがうまくいけば、作品に触れられなくても見えない人は満足します。コミュニケーションがうまくいかないと、「何も収穫なし」という可能性もあります。見えない人のことを知り、作品についていろんな話をして下さい。

対面リーディングでも、事例は少ないですが、絵画や写真集の希望もあります。また、旅行誌や演劇、映画、コンサート、スポーツなど、写真を多用した図書もあります。
これらの説明は絵画の説明に通じる所があ

ります。

もう一つ大事な事は、見える人の気持ちが充実していることも、非常に大切です。作品を見ることに集中していなかったりすると、見えない人にも伝わってしまいます。相手に楽しんでもらうには、自分が楽しめるようにしましょう。自分の好きな作品や気になったことを、紹介するような気持ちで話をすると良いと思います。

作品のピックアップ

「触れられるかどうか」には関係なく、作品を見て下さい。また、作品数が多いときには、適当にピックアップして案内して下さい。ピックアップの方法は、「特徴的なもの」「印象的なもの」「自分の好きな（あるいは、感動した）もの」「案内しやすいもの」など、どんな基準でもＯＫです。自分の力量に合わせて、見えない人と相談しながら会場内を進んで下さい。

美術館は広くて、作品を見るだけでも足が疲れてきます。メリハリを付けるのも一つの方法ですね。

対面の場合は勝手に飛ばすわけにはいきません。最低限でもキャプションを読み、必要かどうかを利用者に判断してもらいましょう。

作品の前に来たら

平面の作品が多い場合には、言葉による案内が主になります。「作品を目の前にして、二人で語り合う」というように考えて下さい。見える人は、見ているものや感じたこと・連想したことなどを次々言葉にしていって下さい。見えない人は、言葉からイメージを膨らませて、作品を想像していきます。

見えない人が、作品に関心を示してくれたら大成功です。作品の印象などから、会話を始めるのは経験的に有効です。また、「何が描かれているか」ということから始めるのも有効です。

大切なのはガイドする人、される人という一方通行な関係にならないことです。

何を話したらいいか

会話の話題は、作品の印象・描かれているもの・構図・色彩など、何でもけっこうです。ただしこの時、全体から部分へというように、話を進めて下さい。見えない人がイメージを作りやすくするために、話題を転々としないよう注意して下さい。その他、作品から連想したことや作品の背景・作者のこと、技法や美術史的なことなどと、際限なく話題はあります。これらの話題の１、２個を使ってもいいですし、会話がどんどん進んでもかまいません。また、場合によっては他の人が会話に参加しても良いかもしれません。

重要なことは、「会話をしている」ということです。お互いの関心度や会話のリズムによって、話題を選んで下さい。それから、見える人のセンスや知識を自由に使って、滑らかに話せるように心がけて下さい。

見える人が、考え込んで言葉に詰まってしまうと、見えない人は取り残されてさびしい思いをします。

作品に触れられるということ

作品自体に触れてもよいものは、適度に会話をしつつ両手で触れるようにして下さい。

「見えない人だったら、触れれば全て分かる」というわけではありません。**人によって「触る力」も違います**ので、想像力が高まるように会話で盛り上げて下さい。また、平面の作品においては、そのサイズを知るために作品の縁（あるいは額）をなぞることは、有効なことだと思います。アクリルのケース

に入っているものならば、「この中に入っています」といって触れてもらうと、見えない人は見ている実感が持ちやすいものです。

気をつけることは、作品を傷つけないように細心の注意を払うことです。指輪や腕時計やブレスレットなど、少しでも作品を傷つけるおそれのあるものは、必ず触る前にはずしましょう。

対面の場合は彫刻を触るというシーンはありませんが、携帯電話の説明書など持ち運びのできる小さな機器では触って説明することが可能です。

取扱説明書の写真を言葉で説明するより、実際に触ってもらいながら説明するのが一番分かりやすい方法です。『百聞は一触にしかず』でしょうか。

コミュニケーションの仕方

見えない人と接する上で、どんな対応をするべきかを決める一番大切なことは・・・何でしょうか？

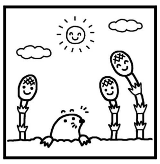
それは「常に相手の気持ちを考えながら行動すること」でもなければ、「自分の気持ちを相手に分かりやすく説明していくこと」でもありません。これらは、まったく必要ないとは言えませんが、よく考えてみると、このどちらの考え方も自分が中心になっていることが分かります。

自分を中心にものごとをすべて考えていくと、相手の気持ちが分かりにくくなります。もちろんこれは見えない人と接する場合に限ったことではありません。人と人の関係においてそうなのであって、これはコミュニケーションと言ったりもします。

しかし、特に、見えない人とのコミュニケーションにおいてはなぜか「構える様な態度」が用意されているように感じます。どうすればいいのか分からなくなった時に、どうすればいいのか、分かっていなければいけないなどと思ったりしたがるのです。

そしてこういうのをスキルなどと言ったりする。人と人のことは、やはり人と人の間でなんとか、どうにか、歩み寄るべきなんだと思います。よく分かってなくていいから、すべてパーフェクトでなくていいですから、だから、自分が世界の中心になりすぎると、一方通行の関係しか作れなくなるような気がします。「分かってる様な気がしている」のは、実はとても自己中心的なことなのかもしれません。視覚障害のある人と接する上で、どんな対応をするべきかを決める一番大切なことは・・・＜**本人に聞く**＞こと　です。

「ＭＡＲ」の活動は素晴らしいですね。対面リーディングでは美術館に行くことはありませんが、図書の中には美術全集や写真集のように美術館や作品展に足を運ばなくても楽しめる本があります。大いに参考になりますね。



それとは別に文章を補足する為の挿画(そうが)や写真があります。ここで、気をつけなければいけないことがあります。

絵や写真そのものを鑑賞して楽しむものと、文章を補完するための絵や写真の説明方法とは自(おの)ずと変わってきます。

後者の場合、鑑賞目的のものではありません。文章を補完するために挿入されたものなので文意を判断して、本文の内容に沿った簡潔な説明が求められます。あくまでも本題は文章であり、絵や写真は本文を補足するためのものです。

いずれにしても、絵や写真の説明は難しく、一筋縄ではいきません。

最終的な決め手は、コミュニケーションを密にして、本人に聞く事でしょうか。

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

Lion Heart　ライオンハート

【所在地】　大阪市西区江戸堀1-11-12　日本興亜肥後橋ビル別館1F
【電話番号】　06-6441-1112
【行き方】　地下鉄四つ橋線　肥後橋駅９番出口スグ　肥後橋商店街を入って左側
【営業時間】　ランチ＝11:30～14:00（月～金曜）　バー＝18:00～24:00
【定休日】　日曜日

前から行きたかったヒマラヤトレッキングが急遽決まりました。嬉しくて前祝いも兼ねて、心斎橋と肥後橋の２軒のネパール料理店に行ってきました。

右の人がネパール人シェフ

どちらの店もネパール人が調理を担当され、本格的なネパール料理です。

今回は肥後橋の Lion Heart を紹介します。名前からはとてもネパールを想像することはできません。おそらく夜のバーに合わせて店名を付けられたのではないでしょうか。

ランチの「日替わりカレー」はサラダも付いて６００円です。その日は「牛すじカレー」と「チキンカレー」でした。どちらにしようかと迷ったのですが、「牛すじカレー」にしました。辛さこそ控えめなものの、しっかりネパール風にスパイシーなカレーです。肉もたっぷり入っていて、カレーとよくあいます。

ネパールには行ったことはないのですが、若き頃、バックパッカーとしてインドを旅しました。インド料理とネパール料理はよく似ています。当時はお金もなく、確か50円かせいぜい100円程度の食事をしていたと記憶しています。その時に食べたカレーとは違いとても上品な味です。

月日がたち、現地の人の味覚が変わったのか、日本人風にアレンジしたのか分かりませんが、口にあいます。ネパールのカレーは辛いのではと思われる人が多いのではと思いますが、ここのカレーはとてもマイルドで食べやすいです。

辛いのが好きな人もご安心ください。テーブルには「チリパウダー」が用意してあります。しかも、かけ放題。辛さも自由に調整できます。

食後は、100円追加でコーヒー、200円追加でチャイを頂くことができます。

また、昔話になりますがインドでは道端に作られたバラックのようなチャイ屋さんが沢山あります。店の汚さと反比例して、これがすごく美味しいのです。牛乳か山羊の乳に水と紅茶を入れてシナモンやクローブ、カルダモンなどを加え煮込み網で漉します。熱くて、甘くてインドの気候にはピッタリの飲み物です。

できれば200円追加してチャイを飲まれることを推薦します。こちらも上品な味が口の中いっぱいに広がります。

夜のバータイムではモモ（ネパール風蒸し餃子）を食べることができます。作るのに比較的手間がかかるため、家庭では特別な日に食べるようです。体調を整えるスパイスがふんだんに入ったネパールの代表的な料理でピリ辛のタレにつけていただきます。

昼のカレーが気に入れば、夜のモモもぜひ食べてください。

人と人生

ヘレン・ケラー　Helen Adams Keller

［１８８０年6月27日～１９６８年6月1日（８７歳没）］

対面リーディング・ボランティア　望月（もちづき）　明（あきら）

●ヘレンの生い立ち・活動

☆アメリカ合衆国アラバマ生まれ。教育家、社会福祉活動家、著作家。‘盲聾唖’の三重苦を持つ身体でありながら、世界各地を歴訪し、障害者の教育・福祉に尽力した。

☆１８８２年、２歳の時に高熱を発する。医師と家族の懸命な治療により、かろうじて一命は取り留めたものの、「視力」「聴力」「言葉」を失い、話すことさえ出来なくなった。

☆１８８７年、ヘレンの両親は、聴覚障害児の教育を研究していたアレクサンダー・グラハム・ベル(電話の発明者)を訪れ、ベルの紹介でパーキンス盲学校(マサチューセッツ州)の校長マイケル・アナグノスに手紙を出し、家庭教師の派遣を要請した。そして、派遣されて来たのが、同校を優秀な成績で卒業した当時２０歳のアン・サリヴァンであった。サリヴァンは小さい頃から弱視であったため(手術をして当時はすでに視力はあった)、自分の経験を活かして、ヘレンに「しつけ」「指文字」「言葉」を教えた。
おかげで、ヘレンはあきらめかけていた「話す」ことが出来るようになった。サリヴァンは、その後約５０年にもわたって、‘良き教師’として、そして‘友人’として、ヘレンを支えて行くことになる。

☆ヘレンは、福祉活動のみならず、広範囲な政治的関心を持って活動した。当時としては、先進的な思想を持ち、男女同権論者として、婦人参政権や避妊具の使用を主張した。また、人種差別反対論者であり、過酷な若年労働や死刑制度、そして、第一次世界大戦の殺戮にも反対した。これらの活動ゆえに、ヘレンはＦＢＩの要調査人物に挙げられた。また、最初の訪日の際には、特別高等警察(特高)の監視対象となった。(特高：思想犯罪に対処するための警察。社会運動などの弾圧を行なった。第二次大戦後廃止)

●ヘレン・ケラーと日本ライトハウス

(日本ライトハウスホームページよりの抜粋·要約)

☆日本ライトハウスは、その創設者岩橋武夫とヘレン・ケラーの２０年間に亘（わた）る篤（あつ）い友情と信頼の元に育まれ、今日まで歩んできた。岩橋武夫がカナダからメキシコに至る講演旅行のために渡米したのは、１９３４(昭和９)年８月。アメリカに滞在中、ヘレン・ケラーの家を訪れた岩橋武夫は「日本に来て、ぜひ盲人に力を貸して下さい」と来日を強く願い、同意を得ることが出来た。

☆ヘレン・ケラーは身体障害者福祉法の制定に大きな影響を与えた。
　ヘレンの初めての訪日。１９３７(昭和１２)年４月、ヘレンは横浜港に降り立つ。

行なわれた講演や対談は、‘奇跡の聖女’として、各地で熱狂的な歓迎を受け、人々を勇気付けた。ヘレンの２回目の来日は、その後の日本の福祉制度の整備や人権意識、自立を支える運動に大きな影響を与えた。そして、岩橋武夫は点字図書館の充実、盲人用具の開発と配布、職業へのアプローチ、病める人々へ手を差し伸べることなどを目標に活動した。しかし、１９５４年１０月、喘息の激しい発作で帰らぬ人となる(享年５６歳)

☆１９５５(昭和３０)年６月、ヘレン・ケラーは、岩橋武夫の霊前に花輪を捧げるために、三たびライトハウスを訪れた。その翌年に建立された岩橋武夫の碑には、ヘレン・ケラーの言葉が次のように記されている。
「その解き放つ心、日本盲界に光り輝く
タケオ・イワハシ」

●ヘレン・ケラーの言葉

以下の１つ１つの言葉が、心にしみます。

＊『私は一人の人間に過ぎないが、一人の人間ではある。何もかも出来る訳ではないが、何かは出来る。だから、何もかもは出来なくても、出来ることを出来ないと拒みはしない。』

＊『私は、素晴らしく尊い仕事をしたいと心から思っている。でも、私がやらなければならないのは、ちっぽけな仕事をも、素晴らしくて尊い仕事と同じように立派にやり遂げること。』

＊『私は、自分の障害を神に感謝しています。私が自分を見出し、生涯の仕事、そして神を見つけることが出来たのも、この障害を通してだったからです。』

＊『盲目であることは、悲しいことです。けれど、目が見えるのに見ようとしないのは、もっと悲しいことです。』

＊『結局、真の知識を得ようと望むものは、誰でも艱難(かんなん)の山を一人で登らなければならず、頂上への王道がない以上、私は、曲がりくねりながら登らねばならぬことに気付いたのです。』

＊『こつこつと気長にやれば、人が望む、どんなことだって出来るものです。』

＊『うつむいてはいけない。いつも頭を高くあげていなさい。世の中を真っ正面から見つめなさい。』

＊『初めはとても難しいことも、続けていけば簡単になります。』

＊『大きな目標があるのに、小さなことにこだわるのは愚かです。』

＊『安全とは、思いこみに過ぎない場合が多いのです。現実には、安全というものは存在せず、子供たちも、誰一人として安全とは言えません。危険を避けるのも、危険に身をさらすのと同じくらい危険なのです。人生は危険に満ちた冒険か、もしくは無か、そのどちらかを選ぶ以外にはありません。』

＊『自分の欠点を直視し認めることです。ただし、欠点に振り回されてはいけません。忍耐力・優しさ・人を見抜く目を、欠点から学びましょう。』

＊『あきらめずにいれば、あなたが望む、どんなことだって出来るものです。』

＊『本当の教育は、「知性と美しさと善良さ」を組み合わせたものです。そして、このうち一番大切なものは「善良さ」です。』

＊『物事を成し遂げさせるのは、‘希望と自信’です。』

＊『人生はどちらかです。勇気をもって挑むか、棒にふるか。』

＊『ベストを尽くしてみると、あなたの人生にも他人の人生にも、思いがけない奇跡が起こるかもしれません。』

＊『何か素晴らしいことを達成するための努力というものは、決して無駄にならないことを覚えていなさい。』

＊『個性は、安らぎや静けさの中で生まれるものではありません。試練や苦しみを経験することでのみ魂が鍛えられ、洞察力が研ぎ澄まされ、野心が鼓舞され、成功が手に入るのです。』

＊『人生は胸躍るものです。そして最もワクワクするのは、人のために生きる時です。』

＊『他人の人格について語る時ほど、自分の人格を露呈することになります。自分はこの程度の人間だと思った瞬間、それ以上の人間になることが出来なくなります。』

＊『十分な時間をかけて努力を続ければ、成し遂げられないことなど無いのです。』

＊『元気を出しなさい。今日の失敗ではなく、明日訪れるかもしれない成功について考えるのです。』

＊『悲しみと苦痛は、やがて人のために尽くす心という美しい花を咲かせる土壌だと考えましょう。心を優しく持ち、耐え抜くことを学びましょう。』

＊『幸せとは、視野の広い深遠な知識を持つことです。その知識とは、嘘と真実、低俗なものと高尚なものを見分ける力です。』

＊『私たちにとって敵とは、‘ためらい’です。自分でこんな人間だと思ってしまえば、それだけの人間にしかなれないのです。』

＊『幸福は、自己満足によってではなく、価値ある目標に忠実であることによって得られる。』

＊『人々の思いやりがあれば、小さな善意を大きな貢献に換えることが出来ます。』

＊『皆が皆のために働く、それが本当の愛国心。』

＊『一つの幸せのドアが閉じる時、もう一つのドアが開く。しかし、しばしば私たちは閉じたドアばかりに目を奪われ、開いたドアに気付かない。』

＊『光の中を一人で歩むよりも、闇の中を友人と共に歩むほうが良い。』

＊『もしも、この世が喜びばかりなら、人は決して勇気と忍耐を学ばないでしょう。』

＊『世界を動かすのは、英雄の強く大きなひと押しだけではありません。誠実に仕事をする一人一人の小さなひと押しが集まることでも、世界は動くのです。』

＊『世界は確かに苦難に満ちているかも知れません。でも、それを多くの人が乗り越えているのも事実です。』

〔注〕以上は「人生を支える言葉　癒しツアー　ヘレン・ケラーの名言・格言集」、Wikipedia及び日本ライトハウスやその他ホームページより抜粋・要約したものです。

お知らせ

・サービスフロアが模様替え

3月24日（火）から、情報文化センター5階サービスフロアのテーブルなどの配置が大きく変わっています。対面リーディングでお使いいただく辞書などの資料や新聞の置き場所も変わりましたので、ご不明の点は職員にお尋ね下さい。

また、大型書架が3階に移動したことに伴い、ボランティア友の会文庫の書籍も3階へ移動しました。友の会文庫の貸出などについては3階総務係へお尋ね下さい。

・対面リーディングの受付、コーディネートの担当について

3月までは谷口・木田・福田の3名で対面リーディングの受付とコーディネート業務を担当しておりましたが、4月からは木田・福田の2名での担当となります。

引き続きよろしくお願いいたします。

ありがとうございます

３月１９日（木）に行われたボランティア交流会において、対面リーディングで長年ご活動いただいているお二人が２０年以上表彰を受けられました。

廣岡 敏雄（ヒロオカ　トシオ）さん
おもに英語の対面をお願いしているほか、日本語も旧字体の本から現代の新聞まで、幅広いニーズに対応いただいています。

沼田 淨子（ヌマタ　ジョウコ）さん
日本語の資料、特に最近は新聞や小説、資格試験のための本などを読んで下さっています。活動開始数年後の97年から5年間は、世話人もつとめて下さいました。

待ちに待った春、桜の季節です。ついでに言うと花粉の時期でもあるのが難点ですが…。関西には桜の名所がたくさんあります。今年はどこへ行こうかと今から楽しみです。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）